

留学先国名 : アメリカ

留学先学校名 : San Francisco State University

留学期間 : 平成 25 年 8 月 ~平成 30 年 5 月

1 月の 2 3 日より春学期がはじまりました。この半年は思ったよりもいろいろありました。今回の主なトピックはトランプ大統領就任、冬休みの様子、就職活動の進展の三点です。

ついにトランプ大統領が就任しました。私としてはアメリカ合衆国という国の性質を不思議に感じると同時に一種の諦めというか呆れを感じています。ドナルドトランプ氏が立候補を表明したのが一昨年、昨年の 1 月の段階では多くのアメリカ人がトランプのことを悪いジョークとしか思っていなかったように思います。アメリカの大統領選挙は日本の内閣総理大臣を選ぶときのそれとは趣が全く違います。国民は二度投票する機会が与えられます。最初の予備選挙でそれぞれの党からの代表者を決めます。予備選挙の日時は州によって異なりますが早い州で 2 月、遅い州で 6 月頃に選挙があります。その後 1 2 月に行われる総選挙でそれぞれの党の代表者の中から次期大統領が選ばれます。昨年の 1 月、冬クラスで政治学の授業を取っていました。そのクラスの中でもトランプが共和党の代表になることさえあり得ないだろうと教授が話していたのを覚えています。そのクラスの直ぐ後に共和党の立候補者が次々と辞退を表明、予備選挙の結果、トランプが代表となりました。対する民主党の候補者はバーニーサンダース氏とヒラリークリントン氏。クリントンのスキャンダル等による不人気もありサンダースは善戦をしましたが立候補を表明するのが遅く、民主党の中でのクリントンの影響力の大きさと財力の大きさもあり、民主党の代表となりました。1 2 月の総選挙の直前まで多くのメディアがクリントン優勢を報じ、アメリカの多くの国民が今回の選挙の結果を全く想像していなかった状況でした。クリントンとしてはホワイトハウスでの経験やこれまでの政治人生で培った知識もあり、突然現れたビジネスマンにまさか敗れるとは想像もしていなかったでしょう。

私の見立てではトランプが勝利するに至った要因が 4 つあります。要因の一つは 8 年に及ぶオバマ政権による左傾化です。黒人の大統領がオバマケアを含む様々な政策を打ち出し、資本主義と民主主義の二つの柱でもって成り立っていたアメリカ合衆国が崩れていく危機感を抱いた人が多かったのではないかと思います。民主党と共和党の二極化が激しいアメリカでは共和党がダメなら民主党、民主党がダメなら共和党、と政権交代を繰り返している背景があります。二つ目は民主党代表であるクリントンの不人気が挙げられます。政治に長く関わってきたクリントンに国民の不満を解消してくれそうな目新しさはなく、メールが流出するなどのスキャンダルも多く見受けられました。もともと多くの支持者を得ている民主党ですが、サンダースの敗退により、支持者の多くが民主でも共和でもない第三党に流れたと言われています。三つ目がトランプの支持率の高さです。極右的な考え方の人たちが想像以上に多くいたということでしょうか。移民が多く入ってくるアメリカで一時は 80%以上いた白人の人口が年々減少傾向にあります。近年の LGBT の人々の結婚を裁判所が合憲であるとしたことや、中絶を合法とする傾向はこれまでの白人の地

位をますます脅かすことになっているのであろうと思います。四つ目の要因はアメリカの格差の大きさです。今でこそオバマケア等の制度がありますが、アメリカの貧困層はろくに医療も受けられず、教育も全く行き届いていないのが現状です。選挙で投票するにあたって有権者は選挙の二週間前までに選挙登録をすることが求められます（州によって異なります）。アメリカの貧困層は選挙に対する正しい情報を得られる機会が全くない上に、選挙登録をしないと投票できないというハードルもあり、選挙に行かなかった人も多くいたのではないかと考えられます。アメリカの貧困層、特に黒人層が選挙に行けば違った結果であったのではないかと思います。

CNN の調査では就任式直前のトランプの支持率は40%程であったと言われています。しかし総選挙で多くの投票があったことと、総選挙前の報道ではクリントン優勢をうたっていたことを考えると、その数字も信頼できる数字ではありません。これからのトランプ大統領の動向と日本政府のアメリカ合衆国との付き合い方がとても気になるところです。

この冬休みはドイツ、オーストリアを旅行して日本に一時帰国してきました。サンフランシスコの友達がオーストリア、ウィーンに留学していたことをきっかけにオーストリア旅行を決めました。ドイツにも友達がいたこともあって、ドイツも一通り回ってきました。

大晦日にベルリン入りして（サンフランシスコからベルリンまで航空券がなんと209ドルでした）、ベルリンの中心で開かれる無料のイベント、シルベスターに行ってきました。ベルリン市内の至る所で花火や爆竹が猛々しく炸裂し、爆音と煙で戦場を思わせる雰囲気になっていました。その後もベルリン市内を観光しベルリンの壁博物館やドイツ歴史博物館等を見学し、日本では学ぶ機会に乏しいドイツの歴史を学ぶことができました。日本にいると戦争とは私たちの祖父母の時代の話であるという認識でしたが、ベルリンの壁崩壊が1989年であることからわかるように、世界の多くの国では戦争はまだつい最近の出来事であると認識されています。かつては同盟国であったドイツの歴史と現状を日本と比べることで近代史に対する正しい認識を持つことが必要不可欠ではないかと思いました。日本では大学に行けば近代史を詳しく学ぶことができますが、高校生までは近代史を時系列の出来事を覚えるだけで、その当時の時代背景や教訓を学ぶことはできません。これは日本人の若い世代のある意味での平和ボケの要因となっており、グローバル化が叫ばれる日本文化や経済の発展の大きな足かせになっているのではないかと思います。

旅行の内容からは外れますが、似たような意味で日頃から感じている日本の悪いところを挙げます。近年一般企業での過労死やサービス残業等が話題となり「ブラック企業」という言葉を耳にする機会が増えました。おそらくマスメディアがこの「ブラック企業」という言葉を作ったのだと思いますがグローバルな視点から見てこの呼び方には大きな問題があります。グローバルな視点で見ればブラックという言葉から連想されるのは黒人のことです。「ブラック企業」と聞いて黒人が運営する、もしくは黒人の多く働く企業を思い浮かべてしまうのです。悪い企業、というイメージから、黒もしくはブラックを連想したのでしょうか、この呼び名では呼び名変更のクレームが相次いでもおかしくはありません。テロ組織の呼び名が「イスラム国」から「ISIS」等に変更されたのを思い出すと想像しやすいかと思います。このように日本のメディア、並びに国民の国際感覚の欠如は日本にとって大きな障害となるでしょう。

この冬日本に帰国したのは就職活動のためです。日本滞在期間は4日ほどしかなかったのですが、その内の1日を使って自動車メーカーの面接を受けました。サンフランシスコで適正テストがあり、力試しだと

思って受験したのがきっかけで、企業説明会、グループワーク、面接、スカイプ面接を経て日本での面接をする運びとなりました。卒業まで約一年となったので今年は今までよりも就職活動に力を入れていくことになりそうです。日本に 2 年ぶりに帰国して思ったのですが、まだ正直、日本に帰って落ち着きたいとは思いません。朝 9 時からの面接だったので出勤する多くのサラリーマンに紛れてぞろぞろと歩いてオフィスまで行ったのですが、それが中学高校時代の憂鬱な登下校を思い出し嫌な気持ちになりました。出勤、帰宅ラッシュも久しぶりに経験し、これを毎日何十年も続けることになるかと思うと憂鬱にならずにはられませんでした。

そんなわけで就職活動はとりあえず続けていきますが、なるべく海外で働けるような方向性を模索していこうと思います。